

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

藏田 愛子

【所属】(助成決定時)

東京大学総合研究博物館

【研究題目】

近代日本の植物画研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、植物を科学的に描出した明治期の「植物画」に、いかなる表現上の特徴や傾向がみられるのかを解明しようとするところにある。植物画は自然のもつ形や色の情報をあらわした一種の記録であり、論文図版や図鑑の原画としても制作されてきた。本研究では、東京大学総合研究博物館所蔵の新出植物画群をおもな分析対象とする。2017(平成29)年、同総合研究博物館のバックヤードにおいて1,000枚以上の植物画が発見されている。これだけの数の植物画がまとまって見出されることはめずらしく、この新出植物画は植物学史上の重要な一次資料であるとともに、明治期以降の植物写生の成立と展開を考える際の格好の美術資料になると考えられる。本研究では、この新出植物画の資料整理と目録作成を進めながら、東京大学附属の小石川植物園に長年勤務した画工・渡部鋏太郎(1860-1905)の描いた植物画を中心とした資料調査を実施する。渡部鋏太郎筆の植物画にみられる描画傾向を考察することで、明治10-20年代の洋画家による植物表現の特徴を探ろうとするものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、東京大学総合研究博物館が所蔵する新出の植物画群(以下、新出植物画)の整理作業と目録作成を進めるとともに、とくに渡部鋏太郎筆の植物画を主たる分析対象とした。

新出植物画は全1104枚からなる。現調査時点において、その新出植物画を描画者別にみていくと、①渡部鋏太郎筆の植物画、②松井昇筆推定の植物画、③高屋肖哲筆の植物画、④その他の植物画(複数の描画者を含む)の四つに大きく分けることができる。このうち本研究では、①渡部鋏太郎が描いたと考えられる約225枚の植物画を中心にみていくこととした。

渡部鋏太郎筆の植物画は、大半が縦置きにした紙に枠線を引き、枠線内に植物を描く配置をとる。画面中央に植物の全体図を配し、全体図の下方やまわりに、花式図、拡大図、部分図を配した構図が比較的多くみられる。また、洋紙に水彩絵具を用い、丁寧な彩色が施されている。

枠線の外の右上端には、数字が付されている。枠線の外の右側面に植物和名、左側面や左下端に日付を、それぞれ小ぶりな字で記す場合があり、植物の学名や和名を書き込んだり、鉛筆で「K. Watanabe」や「WK」等のサインを記した作例もみられる。

本研究では、枠線の外の右上端に付された数字を手がかりに、書き込まれた日付と数字を照らし合わせたところ、この数字は制作時に付された連番であることが判明した。1883(明治16)年につくられたと考えられる一桁、二桁の番号を付した作例では、画面中央にやや小さめに全体図を描く傾向がみられるのに対し、1888(明治21)年以降につくられたと考えられる300番台、400番台の作例になるにつれて、画面に配する全体図や部分図等が増え、画面上の余白が減じる傾向を看取できた。渡部が植物画制作に従事する年数を重ねるにつれ、しだいに画面構成を洗練させていく様子が見えてくる。

【結論・考察】(400字程度)

渡部鋏太郎は 1881（明治 14）年から 1893（明治 26）年まで、小石川植物園で長年にわたり植物写生に従事した人物である。東京大学総合研究博物館所蔵の新出植物画の中には、1883（明治 16）年から 1890（明治 23）年にかけての、渡部鋏太郎の作風変遷がうかがえる多数の植物画を見出すことができた。

また、新出植物画の中には、日本画家・高屋肖哲（1866—1945）が、渡部鋏太郎筆の植物画を模写したと考えられる 57 枚の作例を確認することができた。その一部の図には、高屋のサインや日付が記されている。古い日付は 1905（明治 38）年 6 月 12 日、新しい日付は 1907（明治 40）年 1 月 23 日である。高屋は狩野芳崖の弟子の一人であり、仏画や古画の模写に優れた絵師として知られる。明治 10—20 年代に渡部が描いた植物画を、1905（明治 38）年から 1907（明治 40）年にかけて高屋が写した背景には、二人がともに岐阜大垣の出身者であったことや、渡部が 1905（明治 38）年 1 月に没したことが関係するのかもしれない。高屋肖哲による渡部鋏太郎筆植物画の模写制作については、さらに別の考察が必要であるものの、本研究を一つの起点とし、今後さらに明治期植物画の調査研究を深めていきたい。